

居る、儒學も行はれ史に通じ文章に巧みな者も出て居る、例へば世宗と云ふ天子の王子の如きはその詩才を以て一時に聞えて居つた、或は大臣の中に支那の文明に通じた有名な人もあつた。一々名前を申上げて致し方ないが漢家奴など、云ふ人は漢學者として随分偉い人の一例である、とも角少なからず漢文明を引入れてその光を發揮した次第である。

その次の金の朝廷になつて來ますと、これは遼の時と較べて支那に於ける領土が甚だ廣くなつて參りまして、御承知の通りに南の方に宋を追ひ拂つて兩國の間に境を劃して安徽省の淮水から陝西省の大散關に至る線以北の地は悉く金の領土になつてしまつたといふやうな關係で遼と比べて見ますと直接支那文明に接觸した關係も一層深い、既にこの國が滿洲から起りまして、まだ支那に入らない先、太宗と云ふ天子の時であります、その時に既に斯ういふ詔を出して居る、即ちその國書を書くに付てはよく文を屬するものを選んでこれを造らせなければならぬ、そのために所在に人をやつて博學雄才の人々を探して、さう云ふ人があつたならば厚く手當を加へて、それを朝廷に置き、それに國書を書かせることにせよといふのである。茲に國書とか詔令とか申しますものはこれは漢文で書いたのを指すのでありまして、女眞語を用ゐて居る國民であるけれども、それが支那に入らない前に既に早くも漢文の國書詔令を上手に書く人を探して、それを用ゐた譯である。つまりこれは後に申上げたいことではありますが、斯くして支那の文明の分らぬやうな野蠻なものでない、自分は滿洲の奥から起つた者であるけれども立派な支那の文章を咀嚼して、支那の文明位は分つて居る立派な朝廷だと云ふことを天下に示すためにこゝにいふ方針をとつたものと考へます。次で第三代目に熙宗と云ふ天子が出ました、この天子から後は支那文明化したところの色彩が際立つ